



看護師の声掛け

【奈良県】下竹 柊里^{しも たけ しゅり} 20歳

私は2年前、熊本地震で被災しました。地震により心的外傷ストレス障害を受けている方、高齢者や褥婦^{じよくふ}、さまざまな方が避難所に避難しており、私もその1人でした。

私は地震で小さな格をしてしまい救護室に向かいました。その時の看護師は、傷の手当てに加え「大丈夫？ 地震つらかったね、もう大丈夫だよ、ここにはいろんな大人の人がいるし、みんなで助け合っているね」と、優しい声掛けを行ってくださり、私の心のケアがされました。

また、災害支援のために現場に来ている看護師は、自分自身の家庭もあるにも関わらず、自分の職業に責任をもって現場での看護活

動を行っていました。私はその姿を見て、このような看護師になりたいと思うようになりました。

その時対応してくださった看護師は、テントの見回りの際にも私の顔を見ると「大丈夫？」と声掛けをしてくださいました。何気ない言葉の一つですが、その言葉がうれしかったのを今でも覚えています。

ほかにも「エコノミークラス症候群にお気を付けください」と声掛けを行い、避難所を定期的に巡回されていました。看護師のネームカードを見ると安心しました。私だけでなく褥婦や高齢者など、避難所で過ごされている方とコミュニケーションを行い、避難所での生活環境について情報収集したりして、

避難所の環境整備をされています。

看護師の存在やちょっとした声掛け一つが小さな看護であり、被災し傷ついた心もケアされました。あの時の看護師の声掛けが、私が看護師になりたいと思えたきっかけの一つです。私も看護師となり、看護師という職業に責任と誇りを持ち、患者の心に寄り添った看護を行いたいです。



「思い」を看ていただいた

【東京都】伏見 浩之 ふしみ ひろゆき 56歳

2歳を迎えたばかりの娘が夜中に高熱を出した。1年前に肺炎で入院した経過があるので朝を待たず夜間当番医を探した。見付けたのは5年前に父を看取った総合病院だった。父の入院期間は7カ月ほどだったが、当時のことを思い出し少し重い気持ちになった。しかし、真つ赤な顔で苦しうに息をする娘を見ると迷う余地はなく、電話で予約し妻と急いで身支度を整えると病院へと車を走らせた。

夜間通用口から入ると、そこに懐かしい顔が待っていた。父の入院当時に大変お世話になった看護師さんの1人だった。

「受付から名前を聞いて、もしやと思って待っていました。やっぱりあ

の時の息子さんですね」

「はい。あの節は大変お世話になりました。今日は娘が……」

お辞儀をしてあらためて顔をうかがうとその目に涙が浮かんでいたのが驚いた。今は師長をされているその方は、別の看護師さんに妻と娘を診察室に案内するよう指示すると私を廊下に引き留めた。

「お父さんはね、あなたの結婚をずいぶん心配されてたんですよ。娘さんには申し訳ないけれどこうして会えてよかった。お父さんとの約束を果たせたようで安心しました」

そして当時、病室を訪れるたびに父が話していたという心配ごとの数々を話してくれた。まだ現役だった職場のこと、早くに妻が他界し

たため男手で育てた私や姉のことなど、家族にだからこと言えなかった父の悩みを聞いていたとのことだった。

父が他界し病院を出る時、ほかの看護師さんたちがうつむく中、彼女だけ表情を変えず黙って見送る姿が印象的だったので、まさかそんなやり取りがあったとは思わなかった。父の思いまで看ていただいていたことに5年たつて気付かされた。診察を終え安堵して戻った妻と娘を穏やかな笑顔で迎える姿にあらためて感謝し、この上ない安心感を持って病院を後にした。



柑橘系のアロマ

【千葉県】小口 佳月 おぐち かづき 31歳

妊娠生活というのは、幸せなものだと思っていた。個人差もあるの

だろうか。私にとつての妊娠生活は、決して楽しいものではなかった。つわりがとても重かったのだ。食べては吐きを繰り返し、血も吐いた。水も受けつけず、点滴で水分を補給した。入院は2回した。1度目はつわりの点滴入院。2度目は、情緒不安定による入院――。

妊娠6カ月のときのことだ。つわりは一向に治まらず、私はうつ状態になった。夜もほとんど眠れず、布団の中で泣いていた。そんな私を見て、夫が私の母に電話をした。「もう実家に返しますよ」と。

次の日、私は手首を切った。ナースステーションの前の個室に、

私は入院した。病室の窓は、開かないようにされた。涙が止まらなかった。毎朝、看護師さんが来て、おなかの赤ちゃんの心音を聞かせてくれる。私の子として生まれて、この子は幸せになれるのだろうか。そう思うと、また涙が出た。

病院食も、あまり食べられなかった。開かない窓から陽が差す中、のろのろと箸を動かし、口に運んだ。膳を下げてもらったあと、吐き気がこみ上げた。トイレは病室の外にある。間に合わず、床に吐いてしまった。ナースコールで看護師さんと呼び、泣いて謝った。

看護師さんはニコリと笑い、「大丈夫。びつくりしちゃったね」そして、素早く床の物を片付け

てくれた。

床をきれいにすると、看護師さんがアロマの精油を持ってきてくれた。コットンに精油を湿らせ、机の上に置いた。

看護師さんが去ったあと、枕に頭を預け、ぼんやりとその香りを吸った。目尻を伝う涙が次第に乾いていく。その上をまた新しい涙が伝っていくのが、不思議と心地よかった。

あのときの赤ちゃんは、無事生まれた。弱い私から、色んな人がこの子を守ってくれた。私を守ってくれた。あのときはごめんね、と娘の頭をなでた。



看護の心をみんなの心に

**5月12日は
看護の日**

www.nurse.or.jp

【主催】 厚生労働省／日本看護協会

【後援】 文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】 日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／
テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
パルシステム生活協同組合連合会